

産業展開と市域編成

ー資本主義確立期における岡山市の場合ー

神 立 春 樹

目 次

- 1 本稿の課題
- 2 工業の展開状況
- 3 物産流通と商業
- 4 産業展開にともなう市域の編成

1 本稿の課題

筆者はこれまでに、日本資本主義の確立にともなう地域・民衆生活の再編・変容の検討を、岡山県に大きく素材を求めて、それを対象として行っている。近代産業の展開、近代交通網の形成の過程で、岡山県においても近代工業の発展はあるが、相対的には農業県にとどまり、停滞的であったこと、工業は繊維産業中心にとどまったこと、このような岡山県のなかでは、南北格差に代表される地域格差が進行するが、岡山市はこの地域編成の軸となってきたことなどをみてきた。筆者は本誌前号の拙稿「第一回『国勢調査』における岡山市の住民構成」において、最大の工業地で、かつ最大の商業地であり、また交通の要地として、終始地域編成の軸となってきたこの岡山市の産業都市としての性格を住民構成の検討を通じて明らかにしたが、本稿は、それを前提として、岡山市における産業展開の様相と市域編成を検討しようというものである。

前稿では、「国勢調査」にもとづいて、人口統計から岡山市の産業都市としての性格を明らかにすることを課題とした。その結論はつぎのごとくであった。

岡山市は、本業者中の工業の割合が男女ともに全県のそれよりはるかに高く、それを第一位とする工業都市である。しかしその高さは八幡市、前橋市、今治市などの工業都市と比較するとはるかに小さい。工業の中では、男は必ずしもそうとは言えないが、女は繊維工業が大きく、繊維工業都市である。工業につぐ商業は物品販売が中心で、岡山市は商業都市である。

「職業上の地位」からみると、繊維工業においては雇傭形態が展開しているが、この繊維工業や瓦斯・電気等を除いたその他の工業や、金融・保険業を除いた商業では、むしろ自営業が広汎であることを窺知できた。世帯構成における準世帯人口、本業者身分別の年齢構成、未婚率、出生地などについての検討から、この繊維工業に1000人を越える14歳以下の女子労働者がおり、この14歳以下を含めた若年・未婚の女子労働者が工場寄宿舍に集住しており、このように繊維工業において近代的工場工業が成立していること、他方、物品販売には労務者男に一定数の14歳以下があり、商店の丁稚があることを予想させるものの、しかし商業は多くは自家労働就業であることが窺知できた。

かくして、この国勢調査にもとづく住民構成の検討を通じて、岡山市は産業都市としては商業都市であり、また一方での近代工業形態をとる繊維工業、他方には「伝統的手工業生産を特質とする都市手工業」という二つの類型の工業によって、工業都市には及ばないながら工業都市としての性格をもつにいたっていることを窺知し得たのである。

本稿は、産業統計によって、このような産業都市としての性格をもつ岡山市における産業展開の様相を具体的に把握すること、産業展開に伴う地域編成を検討することを課題とする。なお、サブタイトルにある産業資本確立期の検討である本稿が、主として1919年頃についてのものであるのは、前稿での年に対応させた検討であるからである。

2 工業の展開状況

前稿での「国勢調査」にもとづく検討によって、その住民構成から岡山市の産業の中心は商工業であることをみた。これを産業統計でみていく。『岡山県統計書』によって、その記載のある1913（大正2）年以後の物産構成をみると、1913年は、岡山全県は工産物が最大の45.7%で、以後それは増大して1918年以後は50%台となる。しかし農産物もそれにつぐ大きさで、1913年には44.3%を占めており、以後減少していくが20%台となるのは1923年になってからである。これに対して岡山市は、工産物は初年度で96.9%であり、終始90%台である。農業は初年度ですでに1.4%という小ささであり、1921年から2%台になるものの、この期を通じてそのウェイトは小さい。このように岡山市は、農産物は微小であって、この工業が生産の中心である。以下、この工業の展開状況を検討していく。

第1表は、岡山市の工業の部門別状況を示すものである。『岡山市統計年報』の「工産物製産額」には、90品目について生産数量・価額、製造戸数、職工数（男女別）が掲載されているが、ここには記載されていない酒類、醬油を『岡山県統計書』によって加え、それを当時の部門分類にしたがって集計作成したものである。92品目の工業の総製造戸数は1768戸、その職工数1万3123人、うち男工は39.9%、1製造戸あたり平均職工数は7.4人である。製造戸数では雑工業が52.9%と過半数を占め、ついで飲食物工業が28.2%で、以下機械器具工業、化学工業、染織工業となる。しかし、製造戸数ではわずか4.7%に過ぎない染織工業が職工数では50.6%と過半を占め、さらに生産額ではそこが73.0%と、おおよそ4分の3を占める。製造戸数では52.9%を占める雑工業は職工数では29.7%で、生産額にいたってはわずか8.5%に過ぎず、飲食物工業も職工数では12.2%、製造戸数では12.5%にとどまる。機械器具工業、化学工業は職工数、生産額でも最も小さい部門である。製造戸1戸あたりの職工数では、染織工業は79.7人に達し、ほかがせいぜい5人台であるのと比

第1表 岡山市工業の部門別状況、染織部門の個別的状況

(1919年)

		工業種類	製造戸数	職 工 数	内 男 工	生 産 高		製造戸数1戸あたり		構 成 比		
						数 量	価 額	職 工 数	生 産 額	製造戸数	職工数	生産額
染 織 工 業		5	83	6,634	1,559	—	22,215,999	79.9	267,662.64	4.7	50.6	73.0
機械器具工業		10	165	536	515	—	695,153	3.2	4,213.05	9.3	4.1	2.3
化 学 工 業		17	86	455	293	—	1,126,766	5.3	13,101.93	4.9	3.5	3.7
飲 食 物 工 業		20	499	1,598	1,169	—	3,795,484	3.2	7,609.91	28.2	12.2	12.5
雑 工 業		40	935	3,900	1,699	—	2,575,608	4.2	2,754.66	52.9	29.7	8.5
合 計		92	1,768	13,123	5,235	—	30,409,334	7.4	17,199.87	100.0	100.0	100.0
染 織	綿糸紡績	／	1	1,715	345	14,921	7,968,411	1,715.0	7,968,411.00	0.05	13.1	26.2
	絹糸紡績	／	1	2,374	638	62,658	4,249,182	2,374.0	4,249,182.00	0.05	18.1	14.0
	織 物	／	59	2,430	526	—	9,630,316	41.2	163,225.69	3.3	18.5	31.7
	莫 大 小	／	2	7	4	2,350	5,875	3.5	2,937.50	0.11	0.05	0.02
	製 綿	／	20	108	46	—	362,215	5.4	18,110.75	1.1	0.82	1.2

註 1) 『大正8年岡山市統計年報』の「工産物製産額」より作成。ただし『大正8年岡山県統計年報』により酒類、醤油を補った。

べて非常に大きい。5品目83工場の染織工業には、第1表の染織欄にみるように紡績の2工場と後の第3表にみるように兼営織布の1工場の、職工1700人台から2300人台という隔絶した規模の3工場がある。したがって、岡山市の工業は一方にはほかと隔絶した大規模の紡績工場・その兼営織布工場があって、これが近代工業としてそびえたっているが、他方には規模の小さい雑多な雑工業などが存在しているのである。これらの雑工業などは、染織工業が女工のウェイトが大きいのに比べて男工のウェイトが大きく、都市手工業的工業である。以下、部門ごとにみていこう。

第1表には染織工業のうちわけをもあわせ表示する。全工業生産額の73%を占めた染織工業は、綿糸、絹糸の2の紡績工場のみであわせて30.2%を占め、また、59工場の織物が31.7%を占める。両者で61.9%である。職工数においても、綿糸、絹糸の2紡績工場はあわせて31.1%を占め、織物は18.5%を占めている。59工場の織物のうちわけが重要であるが、ここには巨大織物工場があり、この生産額、職工数における大きな占有割合は、実はこの3工場のそれによるのである。織物のうちの巨大なものを除いた他の織物、メリヤス、製綿はいずれも零細・小規模である。第2表は機械器具そのほかの部門の個別を示す。機械器具は全体では製造戸数において染織や化学を大きく上回り、職工数でも化学を少しではあるが上回るが、生産額においては最小である。その規模が小さい機械器具は、そのうちのいずれもが平均職工数が小さい。鉄工器具器械が機械製造業、車両が船舶車両製造業、農具類から楽器類が器具製造業、そのほかが金属品製造業に属するが、鉄工器具器械に後にみるように機械製造があるが、この機械製造を除いた鉄工器具器械をはじめ車両、農具類、刃物類などいずれも手工業的生産である。ここでは多く職工は男のみであり、3～4人という平均職工規模からして、職工、徒弟をかかえた手工業経営という姿を予想できるであろう。化学には17種類がある。陶磁器からコールトールまでが窯業に、和紙、洋紙が製紙業に、漆器は漆器業に、マッチ、煙火が発火物製造業に、蠟燭が製油及製蠟業に、工業薬品、

第2表 工業部門別状況

(1919年)

		製造戸数	職工数 (内男工)	1戸あたり 職工数	1戸あたり 生産額
機械器具	鉄工器具器械	59	271 (269) ^人	4.6 ^人	4,948.54 ^{円銭}
	車 輜	17	35 (35)	2.5	1,530.00
	農 具 類	14	43 (43)	3.1	15,348.21
	刃 物 類	6	24 (24)	4.0	3,093.33
	曲 物	2	2 (2)	1.0	630.00
	楽 器 類	16	33 (33)	2.1	1,808.44
	亜鉛板及鋳力細工	37	73 (61)	2.0	1,080.11
	金 網 細 工	10	30 (23)	3.0	2,070.00
化学	活 字	1	2 (2)	2.0	1,500.00
	鋳 物	3	23 (23)	7.7	17,128.00
	陶 磁 器	3	5 (5)	1.7	468.00
	硝 子 製 品	2	36 (34)	18.0	20,020.00
	煉 瓦	2	10 (10)	5.0	7,236.00
	瓦	18	54 (35)	3.0	11,785.94
	骸 炭	1	7 (6)	7.0	173,902.00
	石 灰	1	4 (4)	4.0	35,840.00
	コ ー ル タ ー ル	—	—	—	—
	和 紙	19	74 (47)	3.9	2,521.58
	漆 器	1	2 (2)	2.0	1,500.00
	燐 寸	1	99 (77)	99.0	233,268.00
	煙 火	3	5 (3)	1.7	980.00
	蠟 燭	7	35 (23)	5.0	28,335.71
	工 業 薬 品	2	68 (58)	34.0	90,418.00
	売 薬	18	34 (20)	1.9	905.56
飲食物	化 粧 品	4	9 (9)	2.3	8,350.00
	染 料	2	7 (7)	3.5	51,350.00
	線 香	2	6 (3)	3.0	720.00
飲食物	酒 類	17	94 (94)	5.5	56,371.76
	醬 油	25	63 (63)	2.5	9,250.00

		製造戸数	職 工 数 (内男工)	1戸あたり 職 工 数	1戸あたり 生 産 額
飲 食 物	味 噌	9	26 (20) ^人	2.9 ^人	円 銭 7,537.78
	麴	14	33 (24)	2.4	2,742.86
	醬 油 エ キ ス	1	4 (4)	1.0	90,817.00
	製 粉	23	41 (27)	1.8	3,306.09
	麴	5	16 (12)	3.2	10,524.80
	清 涼 飲 料 水	11	25 (21)	5.0	22,550.36
	製 氷	2	10 (10)	5.0	21,751.50
	菓 子 類	230	805 (619)	3.5	5,197.94
	餡	3	15 (14)	5.0	68,257.67
	餡	3	11 (8)	3.7	20,333.33
	罐 詰	7	48 (26)	6.9	23,489.71
	蒲 鉾 竹 輪 類	17	45 (39)	2.6	4,575.29
	豆 腐	87	216 (110)	2.5	1,411.52
	湯 葉	2	8 (4)	4.0	3,600.00
	乾 餛 飩	1	4 (4)	4.0	20,500.00
	生 餛 飩	11	33 (23)	3.0	4,640.00
	蒟 蒻	4	20 (11)	5.0	8,762.50
	漬 物 類	27	51 (36)	1.9	1,931.48
雑	紙 製 品	26	114 (54)	4.4	7,912.31
	扇 子 及 団 扇	2	8 (3)	4.0	7,700.00
	傘 及 提 灯	48	103 (75)	2.1	1,511.04
	木 製 品	174	350 (337)	2.0	1,466.17
	竹 製 品	24	42 (32)	1.8	889.17
	下 駄	69	134 (134)	1.9	1,713.33
	蒲 鉾 板	7	15 (14)	2.1	1,608.57
	割 箸	4	12 (7)	3.0	1,340.00
	印 材	4	9 (9)	2.3	1,050.00
	仏 具 類	9	12 (12)	1.3	2,074.00
	棒 類	3	6 (6)	2.0	1,312.00

(第2表つゞき)

		製造戸数	職 工 数 (内男工)	1戸あたり 職 工 数	1戸あたり 生 産 額
雑	把 柳 製 品	2	7 (3) ^人	3.5 ^人	円 銭 6,400.00
	皮 革 製 品	2	5 (5)	2.5	5,900.00
	靴	23	51 (51)	2.2	1,513.48
	支 那 鞆	1	4 (4)	4.0	18,000.00
	畳 表	38	40 (40)	1.1	226.79
	蓆 座 及 花 蓆	8	87 (68)	10.9	3,300.00
	麦稈経木及真田	218	1,800 (150)	8.3	286.24
	刷 子 及 刷 毛	5	62 (46)	12.4	13,867.00
	筆	8	15 (10)	1.9	1,078.75
	帽 子	12	42 (22)	3.5	6,500.00
	足 袋	39	473 (365)	12.1	15,888.28
	洋 服	61	169 (126)	2.8	2,826.39
	蚊 帳	3	7 (7)	2.3	4,200.00
	防 水 布	1	8 (8)	8.0	220,000.00
	手 拭	8	15 (14)	1.9	15,700.00
	鼻 緒	2	4 (2)	2.0	605.00
	爪 皮	3	19 (17)	6.3	35,020.00
	麻 裏	57	127 (72)	2.2	2,149.21
	半 物 類	64	150 (39)	2.3	1,336.78
	棕 梲 細 工	2	5 (2)	2.5	1,350.00
	野 草 蓆	4	12 (4)	3.0	23,825.00
	蓆 製 品	26	27 (18)	1.0	648.00
	藺 細 工	2	2 (0)	1.0	735.00
	髷 類	15	30 (15)	2.0	1,170.00
	玩 具	2	6 (4)	3.0	1,720.00
	器 械 模 型	3	10 (10)	3.3	2,500.00
	博 物 標 本	1	1 (1)	1.0	1,200.00
	炭 団 及 練 炭	4	8 (4)	2.0	1,767.50
	石 材 製 品	20	43 (43)	2.2	780.00

註 1) 第1表と同一書より作成。

売薬が製薬業に、化粧品が化粧料品製造業に、染料が染料業に、そして線香が雑にという分類に属する。このなかには硝子製造、骸炭、コールトール、マッチ、工業薬品のような移植工業もあるが、同時に在来のものが少なくない。総じてその規模は大きくないが、マッチ、工業薬品、硝子製造の1製造戸数あたり職工数の大きさは、一定の大きさの工場があることを予想させる。飲食物は20種類で、酒、醤油・味噌などのそのほかの醸造物、精穀・製粉、菓子製造、罐詰、水産品、雑の分類に属するものとなる。その規模も小さく、これらのなかには他地域への供給というものももちろんあるが、しかし豆腐、生饅頭のように住民の直接的消費のためのものもあり、大量出荷・販売をねらった近代食品工業はきわめて微弱である。雑工業は40種類で、紙製品から傘及提灯までが紙製品業、木製品から把柳製品までが木竹蔓茎製品業に、皮革製品から支那鞆までが皮革製品業に、畳表から麦稈真田までが藺蓆・麦稈及経木真田業に、刷子及刷毛が羽毛製品業に、最後の石材製品が玉石、牙骨介甲及角製品業、筆から炭団及練炭までが雑業に、それぞれ属する。麦稈及経木真田、木製品、下駄、半物、洋服などが製造戸数が大きく、他方、足袋、刷子及刷毛、藺蓆及花蓆、などが1戸あたりの職工数が大きい。藺蓆及花蓆、麦稈及経木真田は海外輸出産業であるなど新しく勃興したものもあるが、総じて「伝統的手工業生産を特質とする都市手工業」といえるのである。

第3表は、職工10人以上の工場について記した「私設工場」にもとづいて作成したものである。全工場数は55、うち25工場が原動機を使用する、その職工数7606人、うち男工は2328人で男工率30.6%である。1工場平均職工数138.3人である。部門別をみると、工場数では染織が21.8%で全工業におけるよりも大きい。しかし職工数でも84.8%と全工業における50.6%をはるかに上回る比率を占める。機械器具と化学は工場数は全工業におけるよりも比率は大きい。職工数においては小さくなっている。飲食物は工場数は最多であるが全部門中では低下しており、職工数のそれにおいては低下はさらに著しい。雑工業は全工業では製造戸数が全体の52.9%も占めていたが工場で

第3表 岡山市工場 その(一)

(1919年)

		工 場 規 模 別							1工場 あたり	部 門 別 構 成		全製造所の 工場の比率	
		職工10人～	20人～	30人～	50人～	100人～	1,000人～	合 計	職 工 数	工 場	職 工	工 場	職 工
染	織	5－ 73 (12)	1－ 22 ① (14)	2－ 78 (39)		1－ 156 (43)	3－6,116 ③ (1,412)	12－6,445 ④ (1,510)	537.1 人	% 21.8	% 84.8	% 14.5	% 97.2
機 械 器 具		4－ 48 ③ (48)	3－ 64 ② (64)	1－ 32 (32)	1－ 83 ① (81)			9－ 227 ⑥ (225)	25.2	16.4	3.0	5.5	42.4
化 学		3－ 46 (32)	1－ 22 (21)		2－ 167 ② (85)			6－ 235 ② (138)	39.2	10.9	3.1	7.0	51.6
飲 食 物		13－ 161 ④ (147)	1－ 20 ① (4)					14－ 181 ⑤ (151)	12.9	25.5	2.4	2.8	4.6
雑		7－ 76 ② (60)	1－ 23 ① (13)	1－ 35 ① (8)	2－ 147 ① (66)	1－ 124 ① (54)		12－ 405 ⑥ (201)	33.8	21.8	5.3	1.3	10.6
特 別				1－ 38 ① (38)	1－ 65 ① (65)			2－ 103 ② (103)	51.5	3.6	1.4	—	—
合 計		32－ 404 ⑨ (299)	7－ 151 ⑤ (106)	5－ 183 ② (117)	6－ 462 ⑤ (297)	2－ 280 ① (97)	3－6,116 ③ (1,412)	55－7,596 ②⑤ (2,328)	138.1	100.0	100.0	31.0	58.0
規模別比率		58.1 5.3	12.7 2.0	9.1 2.5	10.9 6.1	3.6 3.7	5.5 80.5	% 100.0 % 100.0					
染 織	綿糸紡績						1－1,715 ① (345)	1－1,715 ① (345)	1,715.0	1.8	22.6	100.0	100.0
	絹糸紡績						1－2,374 ① (638)	1－2,374 ① (638)	2,374.0	1.8	31.3	100.0	100.0
	綿 布	3－ 41 (0)		2－ 78 (39)		1－ 156 (43)	1－2,027 ① (429)	7－2,302 ① (511)	328.9	12.7	30.3	11.9	94.7
	製 綿	2－ 32 (12)	1－ 22 ① (4)					3－ 54 ① (16)	18.0	5.5	0.71	15.0	50.0

註 1) 『大正8年岡山県統計年報』より作成。

2) 数字は工場数, ○内はうち原動機使用工場, 職工数, ()内はうち男工数を示す。

は大きく低下し、その職工数のそれはさらに著しい。このように機械器具、化学が工場数において全工場におけるよりウェイトを高めてはいるものの、この両部門の職工をふくめ、染織以外のすべてがウェイトを低下せしめているのである。工場でみると染織がそのウェイトをいっそう高めているのである。ところで、この染織であるが、綿糸、絹糸の両紡績工場、それは工場数、職工数において全工業の場合とまったく同数であるが、それが工場数、職工数のいずれにおいてもいっそうそのウェイトを高めている。それとともに綿布、すなわち織物業である。この綿布に紡績に匹敵する巨大工場があるほか、職工数100人台のものが1ある。第4表は染織以外の部門を示す。機械器具には紡織機械、石油発動機、諸機械などの機械工場、とくに紡織機械には職工83人のものがあるなど機械の生産もみられるが、数も少なく、規模も小さく、総じて展開は微弱である。化学も近代的な化学工業生産ではない。飲食物は罐詰などもあるが、醸造が中心である。雑工業は、新聞印刷を除いて規模は小さい。新聞印刷のみに100人台のものもあり、都市産業の展開を示す。電気、ガスに1工場ずつがある。これまた同様である。

工場の工場数・職工数の全工業の製造戸数、職工中に占める比率は、3.1%、58.0%である。職工で6割近くであり、工業は工場生産となっているといえる。部門的には職工数の占める比率は、機械器具では42.4%、化学では51.6%で一定程度であるが、雑工業、飲食物において工場生産のウェイトはきわめて小さい。そして染織はそれが97.2%と実に大きい。ここには、2000人前後の2紡績工場、それに匹敵する綿布工場があり、それがこのようなことをもたらしめているのである。そして、この3工場が突出した大きさであることは第3表の規模別構成をみれば明白であろう。

以上の工業、工場の検討を通じて、岡山市の工業をつぎのように把握し得る。岡山市は、全生産における工業生産のウェイトが圧倒的であり、生産に関する限り工業地であった。この工業は、生産額でみて、染織73.0%で、飲食物、雑の合計21.0%を加えると94.0%となり、この消費財部門に対する生

第4表 岡山市工場 その(二)

(1919年)

		工場数	職工数	10人未満 工場数	50人以上 工場数	1工場 平均職工数
機械器具	紡織機械	2 ②	96(94) ^人	1 ①	1 ①	48.0 ^人
	製縄機械	1	20(20)	—	—	20.0
	諸機械	1 ①	20(20)	—	—	20.0
	石油発動機	1 ①	24(24)	—	—	24.0
	ポンプ	1 ①	13(13)	1 ①	—	13.0
	自転車	1 ①	10(10)	1 ①	—	10.0
	衡器	1 ①	12(12)	1 ①	—	12.0
	鋳物	1	32(32)	—	—	32.0
化学	硝子瓶・ホヤ	2 ①	36(34)	1 ①	—	18.0
	和紙	1	16(11)	1	—	16.0
	マツチ	1 ①	99(27)	—	1 ①	99.0
	洋ローソク	1	16(8)	—	—	16.0
	炭酸カルシウム	1 ①	68(58)	—	1 ①	68.0
飲食物	清酒	6 ①	74(74)	1 ①	—	12.3
	醬油	2 ①	27(25)	2 ②	—	13.5
	酢	1 ①	18(18)	1 ①	—	18.0
	罐詰	1	16(6)	1	—	16.0
	菓子類	2	20(18)	2	—	10.0
	ラムネ	1 ①	20(4)	1 ①	—	20.0
	製氷	1 ①	6(6)	1 ①	—	6.0
雑	製材	1 ①	15(12)	1 ①	—	15.0
	経木	1 ①	11(10)	1 ①	—	11.0
	花菱	1	14(4)	1	—	14.0
	刷子	1	62(46)	—	—	62.0
	爪皮	1	10(8)	1	—	10.0
	印刷	4 ①	49(39)	3	—	14.8
	新聞印刷	3 ③	244(82)	—	2 ②	81.3
特別	電気	1 ①	65(65)	—	1 ①	65.0
	ガス	1 ①	38(38)	—	—	38.0

註 1) 第3表と同一書より作成。

2) 工場数の○内はうち原動機使用工場、職工数の()内はうち男工数を示す。

産財部門はわずか6.0%に過ぎない。職工数でみると、染織が過半を占めるとともに雑、飲食物も高く、これら消費財生産部門が92.4%で、生産財生産部門はわずかに7.6%に過ぎない。工場生産のみでみると後者はさらに小さく、6.1%に過ぎない。しかし、前者は、そのうちの雑、飲食物は7.7%に過ぎず、染織のみで実に84.8%を占めている。このように生産財部門がきわめて小さいこと、そして染織がきわめて大きなウェイトを占めていること、そして、この染織は、紡績の2工場、紡績兼営織物の1工場によってそのようになっていること、この紡績に近代工場生産をみるほかは、「伝統的手工業生産を特質とする都市手工業」の広汎な存在がみられたのである。

3 物産流通と商業

前稿でみたように岡山市は商業地である。県下最大の商業地である。第5表はこの岡山市の物産県外移出入状況を示すものである。岡山県は、糸類及綿類が実に41.8%という大きさでの最大であり、ついで織物及同製品12.1%、其他雑品10.7%、水産物、肥料、穀類、油類及肥料となる。個別でみると、繰綿が最大で30.1%、ついで綿糸7.9%、米、生魚、綿布及同製品が数%、ついで、其他布類及同製品、石炭、人造肥料などとなる。他方、移出は、糸類及綿類が32.9%を占めて最大で、ついで穀類及果樹野菜類が22.3%、其他雑品13.2%、織物及同製品12.2%、編物及同原料6.9%などとなる。個別では、綿糸が27.5%で最大であり、ついで米が16.0%、綿布及同製品が8.5%、麦5.6%、さらに生糸、畳表、真田などが2～3%となる。岡山県の最大の工業製品である綿糸と綿布、主要農産物である米麦、それに特産品である畳表、真田を移出し、他方、綿糸生産の原料である繰綿、綿布生産の原料である綿糸、農業生産に必要な肥料、エネルギー源である石炭などの農業・工業の原材料、それに米、生魚や、さまざまな消費品を移入する、こういう構成になっている。これと比較して岡山市の特徴をみよう。移入の部門別では、最大は織物及同製品26.4%、糸類及綿類18.8%、水産物17.1%、穀物及果樹野菜類14.2

第5表 物産県外移出入状況

(1919年)

		岡 山 県		岡 山 市	
		部 門 別 構 成 比		部 門 別 構 成 比	
		移 入	移 出	移 入	移 出
	穀類及果樹野菜類	7.5 %	° 22.3 %	14.2 %	° 32.4 %
	水 産 物	8.1	1.3	17.1	0.45
	飲 食 物	2.9	° 2.6	3.5	1.0
	織物及同製品	12.1	° 12.2	26.4	26.5
	糸類及綿類	41.8	32.9	18.8	20.2
	金屬及同製品	2.6	° 4.6	3.1	2.9
	編物及同原料	0.16	° 6.9	0.01	° 6.6
	油類及燃料	6.0	2.0	3.6	0.41
	肥 料	7.9	1.5	2.4	0
	家 畜	0.44	° 0.58	0.90	0.67
	其 他 雜 品	10.7	° 13.2	9.7	8.8
	合 計	100.0	100.0	100.0	100.0
		208,427,832 ^円	° 256,787,854 ^円	66,619,675 ^円	51,054,004 ^円
主 要 個 別 部 門	米	6.5	16.0	13.8	° 19.1
	麦	0.32	5.6	0.13	12.4
	生 魚	6.5	0.44	15.0	0.13
	塩 干 魚	1.0	0.11	0.56	0.27
	食 塩	0.41	0.70	1.1	—
	清 酒	0.21	1.3	0.19	0.53
	砂 糖			2.7	—
	絹布及同製品	2.5	1.1	3.6	1.7
	綿布及同製品	5.6	8.5	12.0	° 17.2
	其他布類及同製品	4.0	2.6	10.8	7.6
	生 糸	0.02	3.0	—	0.06
	綿 糸	7.9	27.5	4.4	° 18.9
	蘭	3.8	2.1	0.51	—
	繰 綿	30.1	0.05	13.7	0.06
	金屬製器具機械	1.4	0.17	1.2	0.36
	花 蓮	0.00	1.1	—	1.0
	量 表	0.02	2.6	0.04	° 5.4
	真 田	0	2.4	—	0.12
	石 油	1.8	0.03	0.79	0.10
	石 炭	3.6	0.27	1.9	—
	木 炭	0.07	1.3	0.04	0.27
	人 造 肥 料	3.6	1.4	1.3	—
	和 洋 雜 貨	1.9	0.09	3.8	0.24
	陶 器	0.20	0.19	0.45	1.2
	洋 紙	0.55	1.7	1.1	° 4.9
	煙 草	—	0.16	1.5	0.81
	材 木	1.9	1.9	0.07	0.20

註 1) 『大正8年岡山県統計書』ならびに第3表と同一書より作成。

2) °は移出額が移入額を上回ることを示す。

％，其他雑品9.7％であり，移出は穀物及果樹野菜類で32.4％，ついで織物及同製品26.5％，糸類及綿類20.2％，其他8.8％などとなっている。全県と比較して穀物及果樹野菜類，織物及同製品が移出入ともに大きく，水産物，飲食物が移入において大きいこと，糸類及綿類，肥料，油類及燃料が移入・移出ともに小さいこと，などをあげることができる。個別部門をみる。米は移入・移出ともに全県より大きく，とくに移出が20％近いこと，移入は全県の2倍であること，生魚が移入において15％を占め，全県の2倍以上のウェイトであること，砂糖が移入において一定程度であること，絹布及同製品，綿布及同製品，其他布及同製品はいずれも移出・移入ともに大きいこと，ことに後ろの二つは全県の2倍以上であること，綿糸は移入，移出ともに大幅に小さく，繰綿が移入の13.7％を占めるとはいえ全県の半分以下であること，石油・石炭は全県では移入の一定の割合を占めていたが，それを大幅に下回ること，和洋雑貨，陶器，洋紙，煙草はいずれも移入・移出ともに全県より大きいこと，などを特徴として指摘できるであろう。総じて，消費物資の移入におけるウェイトが高く，移出でも多様化しているといえよう。最大の工業地ではあるが，綿工業の発展を明確に反映させながらも，むしろ消費品をふくんだ多様な商品の移入地・移出地なのである。

第6表は有力商人の種類別営業税額別人数を示す。これは「商工信用録」によるが，株式会社は除外し，個人と合名・合資会社について整理したものである。41種類と雑多なものからなる各種営業として一括されているものからなる。ここには土木請負業や，酒造業，醬油醸造業，酢製造業などの製造業もふくまれているが，それらをもそのままとりあげた。この年，この営業税30円以上の有力商人は292人を数える。呉服太物商が41人で最も多く，ついで米穀肥料商，材木商，和洋小間物商，酒造業，醬油醸造業，米穀取引所仲買，土木請負業などとなる。営業税規模からみて，呉服太物商，米穀肥料商，米穀取引所仲買，醬油醸造，金物商，油商，砂糖商，問屋業，石炭コークス商，土木建築請負業，それに各種営業中に営業規模の大きい商人がいる。他

第 6 表 岡山市有力商工業者営業種類別状況

(1919年)

	商 工 業 者 営 業 税 規 模 別										その営業税(円)		会社・銀行	
	30円 ～	40～	50～	70～	100 ～	150 ～	200 ～	1,000 ～	無 記入	合計	合 計	1 人 あたり	株式 会社	銀行
呉服太物商	9	5	10	7	4	1	4		1	41	3,732.70	93.32		
古着及仕立物商	6	1	1							8	292.86	36.61		
洋服商	3	1	1							5	191.35	38.27		
綿商	1	1			1					3	183.30	62.43		
足袋商	2	1								3	107.95	35.98		
米穀肥料商	7	1	4	3		1	1			17	1,194.22	70.25		
米穀取引所仲買			1	1	2	1	5			10	1,895.18	189.52		
酒造業	5		2	4	2					13	831.59	63.96		
醬油醸造業	6	1	2	1	1	1				12	760.32	63.36		
酢造業				1	2					3	327.25	109.08		
和洋小間物商	6	7								13	528.71	40.67		
書籍文具商	3	2	1		2					8	405.88	60.74		
紙商	1	3								4	176.00	44.00		
荒物商	3	2	3							8	372.14	46.52		
履物商	3		1							4	163.28	40.82		
諸機械商	2	1		1						4	213.58	53.40		
金物商	3			1	1	1	1			7	927.12	132.45		
薬種商		2		1	1					4	350.20	87.55		
花菱畳表商	2	1		1	1					5	287.50	57.50		
油商		2	1			1				4	324.90	81.23		
砂糖商	2	2		1		1				6	398.13	66.36	1	
菓子商	2	2			1					5	267.27	53.45		
相物干物商	2	1	2		1					6	358.42	59.73		
青物果物商	2		1							3	134.88	44.96		
生魚商		1	1		2					4	388.20	97.05	1	
牛肉商	4	1								5	189.02	37.80		
問屋業			1		1	2	3			7	1,472.17	210.31		
石炭コークス商		2		2	2		1			7	783.83	111.98		
材木商	4	3	5	1	2	1				16	1,049.89	65.62		
土木建築請負業	2		3	1	1	2		1		10	1,949.42	194.94	1	
有価証券売買業	1								2	3	34.00	34.00		
各種営業	19	8	8	6	2		1			44	2,496.77	56.74	11	6
合 計	100	51	40	31	29	13	16	1	3	292	22,788.03	104.05	14	6

註 1) 『日本全国商工人名録』第 7 版 (1919年刊) より作成。

方、古着及仕立物商、洋服商、足袋商、和洋小間物商、紙商、履物商、諸機械商、青物青果商、牛肉商などは営業規模は小さいもののみである。

この点を1人あたりの営業税規模でみよう。289人の全平均で104円05銭である。最大は210円31銭の間屋業で、ついで土木建築請負業194円94銭、米穀取引所仲買189円52銭、金物商132円45銭、石炭コークス商111円98銭、生魚商97円05銭、呉服太物商93円32銭、薬種商87円55銭などとなる。これらが営業規模からみて最も有力商人が存在しているものである。

4 産業展開にともなう市域の編成

(1) 産業の地域的展開

岡山市における近代工業の展開については、『岡山市史 産業経済編』の叙述がある。以下、それをみよう。明治初期の市内の工業のみるべきものは、醸造を中心とした食品工業であった。それは家内工業ないしマニユであって、近代工業の芽生は見られなかった、この間、企業への準備や気運は次第に高まっていたが、企業に対する不安と資本が欠如していたため新企業に着手するものは少なかった、県は政府の殖産興業政策の線にそって、諸産業の育成に努力し、1874（明治7）年に勸業試験場（天瀬）を設け工業や農業の研究指導を行なった。この時代の工業は士族授産という形で県当局や旧藩主の援助のもとに進められた。まず1875年篤好社（機械・醬油・金融）、1876年に天瀬陶器製造所、1879年有恒社（紙・マッチ）、1880年有終社が設けられ、1881年には旧池田藩主の助成で近代的設備を誇る岡山紡績所が設けられた。これらの士族授産の工業と並んで印刷製本・洋芯（ランプ芯）製造などの民間企業もおこりはじめた。この時代の工業は、国及び県の精神的、経済的援助のもとに旧藩主や士族及び問屋層の間からおこってきた。そして1881（明治14）年～1885年の不況時代に泡沫の如く消え、この不況時代を切りぬけた企業は岡山紡績所と二十二銀行だけだったとさえいわれる。…景気が回復すると、麦稈真田紐や綿花蒔などの農産加工業がいち早く勃興し、続いて煉瓦工業や

セメント工業が…おこった。日清戦争による好況時代を迎えると企業勃興の気運はいよいよ高まり、おびただしい企業が勃興した。中でも綿糸紡績、絹糸紡績などでは近代工場が設立され、また食品工業部門では新しく清涼飲料などの小工場群が設立された。この時代における工業の発展はめざましく、特に岡山紡績、備前紡績、共立絹糸が地元産業資本によって近代的機械生産段階に突入した。ここに繊維工業、食品工業を二大支柱とする当市工業の性格ははやくもこの時代に確立されつつあった。1897（明治30）年の反動恐慌、続いて1900、01年の金融恐慌の時代には企業の倒産は目をおおうものがあり、存続したものは三大企業以下僅か十数会社であった。…紡績は、1911年、先に絹糸紡績の大合併に参加した共立絹糸紡績と、岡山紡績、備前紡績の三大企業が鐘淵紡績に吸収され、県外巨大資本の系列下に再編成された。この間日露戦争後の好景気には再び著しい企業の勃興がみられ、特に近代設備をそなえた岡山製紙の設立（1907年）は全国屈指の板紙生産県への基礎をきずいた。⁽¹⁾そして、この工場の所在状況について、「工場の立地を地域的にみると、食品、印刷、花菱などの零細企業には遠心的移動はほとんどみられず、むしろ求心的移動さえ行なわれ内山下などの旧士族屋敷に集中がみられた。他面紡績工業などの大企業や製紙、肥料、たばこなどの中小企業は遠心的移動を行ない市街地の外側に工業地区が形成されはじめた。」⁽²⁾と記している。

第7表は工場の町別所在状況を示す。工場は33町にひろがって所在している。市内中心部には新聞、印刷があるのをはじめ、旧町場には飲食物、雑、それに機械器具があるが、これは多く旧藩時代からの系譜をひくなどの都市手工業であろう。しかし、機械器具、あるいは化学でも周縁部の併合・編入地区にいくつかあること、特別が網浜、七日市などの併合地区にあること、そして巨大な染織3工場は花畑、門田、下石井という周縁部、ないし編入地

(1) 岡山市史編纂委員会『岡山市史 産業経済編』1966年 439～441ページ。

(2) (1)と同一書 442ページ。

第7表 岡山市工場町筋別

(1919年)

	染 織	機械器具	化 学	飲 食 物	雑	特 別	合 計
弓之町		1－ 32(3)		1－ 15(5)			2－ 47(7)
石関町				1－ 16(6)	1①－ 15(1)		2①－ 31(8)
西中山下					2①－ 135(6)		2①－ 135(6)
東中山下					2②－ 108(3)		2②－ 108(3)
下之町		1－ 12(2)					1－ 12(2)
紙屋町					1①－ 13(1)		1①－ 13(1)
内山下		1①－ 10(1)	1－ 22(1)	1①－ 6(6)	2①－ 23(1)		5③－ 61(5)
橋本町				1－ 10(1)			1－ 10(1)
天瀬	1－ 16(6)	1①－ 13(3)		1①－ 20(4)	1－ 14(4)		4②－ 63(4)
富田町	1－ 13(0)						1－ 13(0)
岩田町		1－ 20(2)					1－ 20(2)
柿屋町					1①－ 35(8)		1①－ 35(8)
桶屋町	1①－ 22(4)						1①－ 22(4)
西田町			1－ 16(8)				1－ 16(8)
仁王町	1－ 16(6)						1－ 16(6)
大雲寺町			1－ 14(1)				1－ 14(1)
七軒町					1－ 10(8)		1－ 10(8)
油町				1－ 12(1)			1－ 12(1)
平野町				1－ 10(8)			1－ 10(8)
児島町				2②－ 27(2)			2①－ 27(2)
小野田町	1－ 13(0)						1－ 13(0)
新道	1－ 156(4)						1－ 156 (4)
小橋町				1－ 10(1)			1－ 10(1)
花畑	1①-2,027(42)						1①-2,027(42)
古京町				2①－ 28(2)			2①－ 28(2)
国富	1－ 15(0)						1－ 15(0)
門田	1①-2,374(63)		1－ 16(1)				2①-2,390(64)
網濱	1①-1,715(34)			1－ 15(1)		1①－ 38(3)	2－ 53(3)
上伊福	1－ 30(3)	1－ 24(2)					2－ 54(5)
上石井		1①－ 13(1)		1－ 12(2)	1－ 62(6)		3①－ 87(1)
下石井	1①-1,715(34)	1①－ 83(1)	1①－ 99(2)				3③-1,897(45)
大供		1①－ 20(2)					1①－ 20(2)
七日市	1－ 48(9)		1①－ 68(5)			1①－ 65(5)	3②-181(13)

註 1) 第3表と同一書より作成。

2) 数字は工場数、○内はうち原動機使用工場、職工数、()内はうち男工数を示す。

区に所在しているのである。

商業地については、同じく『岡山市史 産業経済編』は「鉄道敷設前の岡山の中心地は京橋付近であった」として、『山陽吉備之魁』(1883年刊)にもとづく当時の町別所在状況をつぎのように記している。⁽³⁾

…京橋を中心に船着町・橋本町・片瀬町・西中島に多くの回漕店・湊問屋がならび、煙草・茶・藍玉・穀物・砂糖・陶器などの問屋が集っている。生魚・相物問屋は川崎町・二日市に多い。西中島には諸国定宿が並んでいる。京橋河岸から橋本町・西大寺町・新西大寺町にかけ畳表・髪油・蠟燭・砂糖・金銀細工などの問屋があり、小間物・呉服・手拭類は西大寺・新西大寺町と上之町に多い。栄町には山陽新聞社・郵便局・通運会社ができている。上之町から中之島・下之町・栄町にかけて、古着・呉服・小間物・金物・金銀細工・書籍・紙などの店がならんでいる。上之町と下之町には旅宿もあった。紙屋町には荒物・陶器・紅などの店がでている。

京橋から東は西中島とともに貸席・料理店が多く、東中島から小橋・大黒町の街道すじにも各種問屋が散在している。酒・醤油の醸造所は児島町・紺屋町を中心に旭川ぞいに多いが、西川すじにも点々とあった。材木商は船着町と石関町に多く、編笠商は大黒町・森下付近にあり、藍製造所が下出石に二戸あり、ランプ芯製造所が東田町・下之町にあるのも興味深い。

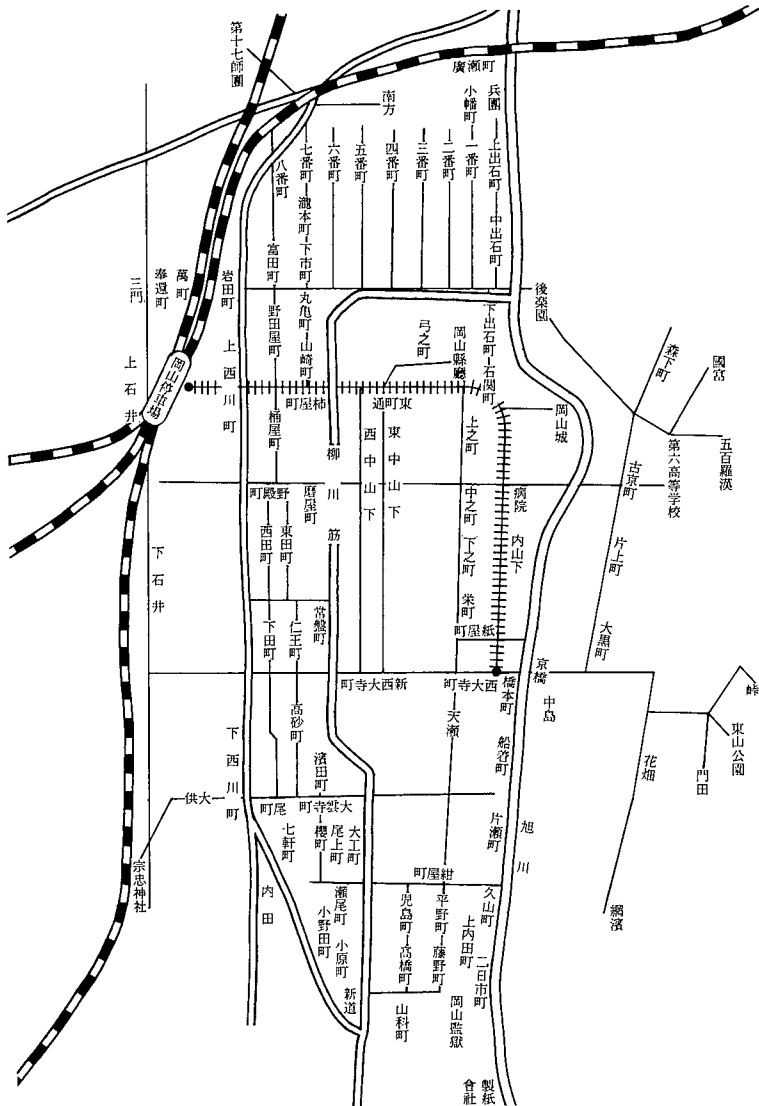
明治前期が京橋を中心とする船の時代であるとする、明治後期は岡山駅を中心とする鉄道時代への転換期である。…鉄道網の発達、単に岡山市の近代化を促進しただけではなく、商業の中心地を移動させるきっかけとなった。まず、岡山駅の設置によって、京橋を中心とした繁栄は駅の方角に引き寄せられ、米穀取引所や山陽商業銀行倉庫・商品倉庫株式会社などの倉庫、河田運送店・岡山運送株式会社などの運送店は駅をめぐる移動し、商店街も京橋に近い西大寺町から駅に近い上之町へと移った。

商業繁栄の中心が上之町のあたりに移った明治二十九年に始まったのが岡山名物の誓文払いである。…明治三十二年からは表八か町の全店を挙げての行事となり、…。

大正時代のおわりごろ天満屋が下之町に百貨店を建設したことにより、商店街の中心地は上之町から下之町へと移動していった。

(3) (1)と同一書 549～552ページ。

岡山市町名一覽図



註 1) 『明治41年岡山県統計年報』の「岡山市明細地図」のかこみ図「町名一覽図」をベースに鉄道、電気軌道路線を書き加えた。

2) 宇野線の部分はまだ開通していないが、「岡山市明細地図」にはすでに記入されている。

このように記されているが、第8表は有力商人の町別所在状況を示す。上石井町が24で最多数で、西大寺町21、中之町20、上之町19、内山下15、橋本町12、新西大寺町、栄町、天瀬町各10、西中山下、船着町それぞれ9が上位で、これを上位として64町にひろがっている。この町別分布にはいくつかの特徴を示す。集中している所が3カ所である。第一は、中之町、上之町、下之町、などのいわゆる表八カ町である。第二は、西大寺、新西大寺町、橋本町を中心とする所である。第三は、上石井町である。

これを1898（明治31）年と比較すると、この間の変化とこの時期の特徴がより鮮明となる。第9表は1898年と1919年の有力商人の上位町を示す。1898年は営業税3円以上で総数は577人と1919年と比較してはるかに多く、より小規模の商人をも把握している。これに対して1919年はより上層の商人のみである。このように把握基準が異なるので厳密を欠くが、傾向を検討したい。1898年の有力商人は577人は合計73カ町村に所在している。最多数は西大寺町で57人、上之町36人、中之町27人、橋本町26人、下之町23人、天瀬町22人にどが上位である。西大寺町、橋本町を中心とし、小橋町、船着町、さらに東中島町というあたりが一つの中心地をなしている。もう一つが上之町、中之町、下之町というあたりである。そのほか、天瀬町、紙屋町、栄町、西中山下、東中山下などと各地に分散している。これに対して1918年は最多数は上石井町、西大寺町、中之町、内山下、橋本町などが上位となっているが、西大寺町、橋本町、などを中心とする商業地、中之町、上之町、下之町という商業地が、中心であるということとともに、この間の変化はいくつかある。第一は、1919年にはトップに上石井町が出てきていること、あわせて下石井町が16位に出ていて、岡山駅の周辺が登場していることである。この上石井、下石井は1898年にはすでに伊島村から岡山市に編入されていたところであるが、ここにはまだ有力商人が存在していなかった。その後急速に成長してくるのである。岡山駅の設置を契機に商業地となったところである。これとやや類似的なのは内山下である。ここは岡山駅から東山への市街電車である岡

第8表 岡山市有力商工業者町筋別

(1919年)

	業者数	業 種 別 内 訳	営 業 税 額	1人あたり 営 業 税 額	株式会社・銀行
			円 銭	円 銭	
弓 之 町	4	酒造業 1, 醬油醸造 1, 油商 1, 牛肉商 1	249.95	62.49	農工銀行
石 関 町	5	材木商 5	252.11	50.42	
下 出 石 町	1	荒物商 1	168.10	168.10	
上 出 石 町	3	米穀肥料 1, 荒物 1, 青物青果 1	120.38	40.13	
上 之 町	19	呉服太物 6, 洋服 2, 足袋 2, 和洋小間物 2, 書籍文具 1, 履物 1, 菓子 1	1,398.06	*	77.90 電気軌道
東 中 山 下	7	呉服太物 3, 書籍文具 1, 有価証券売買業 1, 各種営業 2	354.30	50.61	無尽貯蓄銀行
西 中 山 下	9	呉服太物 2, 書籍文具 1, 牛肉商 1, 石炭コース 1, 各種営業 4	491.29	54.59	修儀裝飾 二十二貯蓄銀行
中 之 町	20	呉服太物 6, 古着 2, 洋服 1, 和洋小間物 2, 紙 2, 金物 1, 薬種 1, 各種営業 5	2,190.27	109.91	
下 之 町	8	呉服太物 2, 古着 1, 書籍文具 2, 履物 1, 各種営業 2	786.56	98.32	
栄 町	10	呉服太物 2, 古着 1, 洋服 1, 和洋小間物 1, 諸機械 1, 金物 1, 砂糖 1, 各種営業 2	472.42	47.24	
紙 屋 町	6	呉服太物 1, 古着 1, 薬種 1, 菓子 1, 材木 1, 有価証券売買業 1	394.49	*	78.49
川 崎 町	2	酢製造 1, 各種営業 1	257.15	128.58	生魚
内 山 下	15	米穀肥料 1, 諸機械 1, 金物 2, 相物干物 3, 青物青果 2, 牛肉 1, 材木 2, 各種営業 2	1,978.70	131.91	電燈
西 大 寺 町	21	呉服太物 10, 古着 1, 洋服 1, 和洋小間物 3, 書籍文具 2, 荒物 1, 履物 1, 薬種 1, 各種営業 1	922.07	43.91	二十二銀行
橋 本 町	12	呉服太物 1, 米穀肥料 1, 和洋小間物 1, 紙 1, 荒物 2, 履物 1, 金物 1, 薬種 1, 花菱表 1, 菓子 1, 相物干物 1	759.78	63.32	
船 着 町	9	米穀肥料 2, 醬油醸造 1, 石炭コース 3, 材木 3	784.15	87.13	
天 瀬 町	10	古着 1, 醬油醸造 1, 諸機械 1, 花菱表 2, 菓子 1, 石炭コース 1, 材木 1, 各種営業 2	501.40	50.14	瓦斯
新西大寺町	10	呉服太物 3, 古着 1, 酒造業 1, 和洋小間物 2, 菓子 1, 各種営業 2	647.01	64.70	

(第8表つゞき)

	業者数	業 種 別 内 訳	営 業 税 額	1人あたり 営 業 税 額	株式会社・銀行
広 瀬 町	1	醬油醸造 1	円 銭 63.29	円 銭 63.29	
下 市 町	2	砂糖 1, 各種営業 1	71.53	35.77	
富 田 町	1	米穀肥料 1	50.70	50.70	
岩 田 町	4	酒造業 1, 諸機械 1, 牛肉 1, 問屋業 1	169.07	169.07	
万 町	4	米穀肥料 4	462.65	115.66	貯蔵銀行
九 亀 町	2	醬油醸造 1, 砂糖 1	70.80	35.40	
山 崎 町	2	荒物 1, 相物干物 2	183.62	91.81	
柿 屋 町	2	和洋小間物 1, 各種営業 1	121.28	60.64	
野 田 屋 町	1	各種営業 1	33.50	33.50	
桶 屋 町	2	綿 1, 酒造業 1	139.06	69.53	
上 西 川 町	3	米穀肥料 1, 土木建築請負業 2	163.00	54.33	電気
下 西 川 町	1	土木建築請負業 1	66.00	66.00	
野 殿 町	3	綿 1, 酒造業 1, 各種営業 1	190.40	63.47	
磨 屋 町	3	土木建築請負業 2, 各種営業 1	1,243.09	414.36	
東 田 町	2	油 1, 各種営業 1	415.10	207.55	
西 田 町	1	土木建築請負業 1	158.00	158.00	
仁 王 町	2	綿 1, 土木建築請負業 1	179.48	89.74	
常 盤 町	1	各種営業 1	34.12	34.12	
高 砂 町	3	呉服太物 1, 酒造業 1, 花菱笠表 1	148.14	49.38	
浜 田 町	3	紙 1, 油 1, 各種営業 1	141.32	47.11	
大 工 町	1	各種営業 1	34.60	34.60	
瓦 町	3	米穀肥料 1, 醬油醸造 1, 花菱笠表 1	211.08	70.36	
片 瀬 町	6	米穀肥料 2, 荒物 1, 砂糖 1, 石炭コークス 1, 各種営業 1	352.68	58.78	砂糖
久 山 町	2	荒物 1, 各種営業 1	88.18	44.09	
上 内 田 町	3	酒造業 1, 醬油醸造 1, 土木建築請負業 1	150.93	50.31	
油 町	1	酒造業 1	71.16	71.16	
児 島 町	2	醬油醸造 2	241.72	120.86	
二 日 市 町	5	酒造業 1, 生魚 4	421.00	84.20	

	業者数	業 種 別 内 訳	営 業 税 額	1人あたり 営 業 税 額	株式会社・銀行
			円 銭	円 銭	
西 中 島 町	2	荒物 1, 材木 1	156.20	78.10	
東 中 島 町	1	醬油醸造 1	129.40	129.40	
小 橋 町	5	酒造業 2, 書籍文具 1, 各種営業 1, 油 1	329.25	65.85	
門 田 屋 敷	1	米穀肥料 1	32.60	32.60	
上 片 上 町	1	醬油醸造 1	76.08	76.08	
古 京 町	2	酒造業 1, 酢製造 1	186.90	93.45	
森 下 町	1	米穀肥料 1	31.04	31.04	
門 田	2	米穀肥料 1, 各種営業 1	75.96	37.98	
南 方	3	酢製造 1, 牛肉 1, 各種営業 1	148.70	49.57	
上 伊 福 町	2	土木請負業 1, 各種営業 1	103.52	51.76	鉄道
上 石 井 町	24	米穀取引所仲買 10, 酒造業 1, 和洋小 間物 1, 金物 1, 砂糖 1, 問屋業 6, 材木 1, 有価証券売買 1, 各種営業 2	2,916.81	※ 126.82	陶器 倉庫 山陽商業銀行
下 石 井 町	5	材木 2, 土木建築請負業 1, 各種営業 2	519.34	103.87	
上 内 田 町	3	足袋 1	150.93	50.31	
下 内 田 町	1	醬油醸造 1	33.72	33.72	
七 日 市 町	1	石炭コークス 1	48.96	48.96	漂白
新 道	—	—	—	—	製織

註 1) 第 6 表と同一書より作成。

2) 1人あたり営業税額欄の※は、業者数中の営業税額不明を除いた者の1人あたり平均である

山電気軌道に面する町であるが、この市街路面電車の開通を契機に商業町となったところといえる。これと対照的に上出石町、山崎町、富田町、東中島町が上位からなくなっている。商業地としての地位が低下している。このような変化のなかで商業地が再編され、上述のような商業拠点が形成されているのである。

西大寺町は、呉服太物が10で、最も多い呉服太物が最も多くここに集中しているなど、商業の最中心地である。しかし、呉服太物商1戸あたりの営業税は40円56銭と小さく、全体でも43円91銭と小さい。新西大寺町、橋本町、

第9表 岡山市有力商工業者所在町筋の推移

(1898・1919年)

	1898年				1919年			
	町名	営業者数	営業税額	同1人あたり	町名	営業者数	営業税額	同1人あたり
		人 %	円	円		人 %	円	円
1	西大寺町	57 9.9	1,046.463	18.36	上石井町	24 8.2	2,916.81	126.82
2	上之町	36 6.3	810.259	22.51	西大寺町	21 7.2	922.07	63.32
3	中之町	27 4.7	595.520	22.06	中之町	20 6.8	2,190.27	109.91
4	橋本町	26 4.5	574.957	22.11	上之町	19 6.5	1,398.06	77.90
5	下之町	23 4.0	364.221	15.84	内山下	15 5.1	1,978.70	131.91
6	天瀬町	22 3.8	324.304	14.74	橋本町	12 4.1	759.78	63.32
7	船着町	18 3.1	502.853	27.94	栄町	10 3.4	472.42	47.24
8	小橋町	18 3.1	380.710	21.15	新西大寺町	10 3.4	647.01	64.70
9	紙屋町	17 2.9	295.476	17.38	天瀬町	10 3.4	501.40	50.14
10	栄町	15 2.6	271.372	18.09	西中山下	9 3.1	491.29	54.59
11	東中島町	15 2.6	197.956	13.20	船着町	9 3.1	784.15	87.13
12	西中山下	14 2.4	463.376	33.09	下之町	8 2.7	786.56	98.32
13	東中山下	13 2.3	537.096	41.32	東中山下	7 2.4	354.30	50.61
14	片瀬町	13 2.3	372.454	28.65	紙屋町	6 2.1	394.49	78.49
15	上出石町	11 1.9	135.238	12.29	片瀬町	6 2.1	352.68	58.78
	富田町	11 1.9	159.937	14.54				
	山崎町	11 1.9	204.834	18.62				
総計	その他とも合	577 100.0	11,377.653	19.72	その他とも合	292 100.0	22,788.03	104.05

註1) 1898年は『日本全国商工人名録』第2版(1898年刊), 1918年は第6表と同一書より作成。

栄町などの西大寺町を軸とする商業地は呉服太物、小間物などが同様にあり、類似であるが、営業税規模も同様に小さく、岡山市商業の中心地としてのウェイトは相対的に小さいように思われる。上之町、中之町、下之町などの商業地もいずれも呉服太物がいくつかずつあり、これに洋服、古着、足袋などの衣料品、小間物品などがあり、西大寺町を軸とするところと同様であるが、営業税は大きく、営業規模の大きい商店があつて、この点からも重心が移っ

ていることを示すといえよう。新興の商業地となった上石井町であるが、ここは米穀取引所仲買10を最大とし、問屋業6などが中心で、米穀取引所仲買はすべてここである。数はわずか1であるが有価証券取引、それに材木など、鉄道駅によってひらけた商業取引地となっているのである。そのほかの町筋についても興味深いことが多いが、詳細は省略せざるを得ない。

(2) 地域別戸口の推移

市制施行以来の現住戸口の推移をみよう。1899（明治22）年に9581戸、4万7564人（男2万3907、女2万3657）であった戸口は、年による減少をもたないながらも増大し、1893年5万人台、1896年1万1千戸台、1899年1万3千戸、7万人台となる。前年比1478戸、1万7105人の増加がある。翌年に8万人台、1907年、1万5千戸台、1908年1万6千戸台、9万人台、1913年1万8千戸台、1919（大正8）年2万0898戸、10万0653人となる。1921（大正10）年に2万4280戸、11万6061人と、前年と比較して一挙に3773余戸、1万9677人の増加をみる。以後も増加していく。⁽⁴⁾岡山市の市域の拡大は、1889（明治22）年6月の市制施行以後は、1899年に上道郡三權村、御野郡古鹿田村の大字七日市、大字二日市の内、大字十日市の内、御野郡の御野村大字南方の内、伊島村大字上伊福の内、石井村大字上出石、大字下出石の内、大字内田の内、大字岡の内、福浜村大字浜野の内、を編入、1921（大正10）年に御野村大字北方、三野、御津郡伊島村、石井村、鹿田村を編入、1931（昭和6）年に御津郡福浜村、上道郡宇野村、平井村を編入、というのが主なものである。⁽⁵⁾1898年から1899年の間に1万7105人、1920から1921年間に1万9677人、1930年から1931年間に1万1539人の増加があるのは以上の接続村の編入に大きくよるのである。

こころみに、この周辺地域の人口増加をみよう。『岡山県統計書』では、町

(4) 岡山市役所編『岡山市史 第六』1938年 3963～3965ページ。

(5) (4)と同一書 3947～3955ページ。

村別戸口統計の記載は1901（明治34）年からである。第10表は1921年にそのすべてを併合した御津郡伊島村、石井村、鹿田村の3村の戸口の推移を示すものである。この間、岡山市の戸数増加率は48.1%、現住人口のそれは12.5%であったが、伊島村は74.3%、63.9%、石井村は49.9%、49.5%、鹿田村は22.8%、15.7%であって、鹿田村の戸数が岡山市のそれを下回っているほかはすべて岡山市を上回っている。とくに伊島村の戸数、人口、石井村の人口のそれが著しい。この間、これら戸数、人口の増加地域をも含んだ御津郡全体がそれぞれ4.5%、4.8%であることとあわせみると、以上の増加が顕著であることはいっそう明白となる。本籍人口に対する現住人口指数の増大も、急速な人口増加を反映するものであろう。また、現住人口中の女子比率の増大は、商業、軽工業都市としての発展とかかわるものであろう。この間の1戸あたり人口が減少していることは、従来の農家主体からの変化を想定させるであろう。伊島村は1899年に大字上伊福の一部を、石井村は大字上出石、下出石を岡山市に編入（上出石を上石井、下出石を下石井と改称）した後の分であるが、接近地域を編入した後に、さらにその周辺地域ではこのような著しい戸口の増加、そして市街地化が進んでいたのである。

人口増減状況を町別にみよう。ところでこの戸口の町別統計は管見の限りでは1901年からであり、それ以前はない。そこで、町別の現住人口と本籍人口の関係から各町の増減状況を推測してみよう。岡山市全体では、本籍人口100に対する現住人口は163.9であって、人口の増加傾向がこれからも明確にみることができるが、それは岡山市のすべての区域で同じではなく、町筋によってそれは大きく異なる。第11表はこの本籍人口に対する現住人口の大きい上位15町とそれが小さい下位15町についてのものである。この指数が大きいのは、上伊福が277.2で最大で、門田、花畑、下石井、六番町、内山下、上石井が200以上で、これに七番町以下が続く。この本籍人口に対する現住人口指数のこの大きさは、これらの町がまぎれもなく人口増加の著しいことを示すのである。これらの人口増加町筋状況からいくつかの特徴を摘出で

第10表 岡山市，隣接村の戸口の推移

(1901～1920年)

		現住戸数	現 住 人 口			本 籍 人 口			現 住 1 戸 あたり人口	本 籍 人 口 100 に対す る現住人口	現住人口 男 比 率
			男	女	計	男	女	計			
岡 山 市	1901年	13,848	43,204	42,452	85,656	21,835	22,182	44,017	6.2	194.6	50.4%
	1920年	20,507	44,421	51,963	96,384	30,346	32,157	62,503	4.7	154.1	46.1
	増減	6,659 (48.1)	1,217 (2.8)	9,511 (22.4)	10,728 (12.5)	8,511 (39.0)	9,975 (45.0)	18,513 (42.1)	—	—	—
伊 島 村	1901年	525	1,254	1,168	2,422	1,464	1,363	2,827	4.6	85.7	51.8
	1920年	915	1,974	1,995	3,969	1,823	1,720	3,543	4.3	112.0	49.7
	増減	390 (74.3)	720 (57.4)	827 (70.8)	1,547 (63.9)	359 (24.5)	357 (26.2)	716 (25.3)	—	—	—
石 井 村	1901年	383	999	916	1,913	865	781	1,646	5.0	116.2	52.2
	1920年	574	1,421	1,438	2,859	1,134	1,112	2,246	5.0	127.3	49.7
	増減	191 (49.9)	422 (42.2)	522 (57.0)	946 (49.5)	269 (31.1)	331 (42.4)	600 (36.5)	—	—	—
鹿 田 村	1901年	417	1,078	1,050	2,128	1,148	1,113	2,261	5.1	94.1	50.7
	1920年	512	1,269	1,194	2,463	1,292	1,249	2,541	4.8	96.9	51.5
	増減	95 (22.8)	191 (17.7)	144 (13.7)	335 (15.7)	144 (12.5)	136 (12.2)	280 (12.4)	—	—	—
御 津 郡	1901年	12,844	31,874	30,505	62,379	34,420	31,744	66,164	4.8	94.2	51.1
	1920年	13,427	32,661	32,709	65,370	38,099	36,171	74,270	4.9	88.0	50.0
	増減	583 (4.5)	787 (2.5)	2,204 (7.2)	2,991 (4.8)	3,679 (10.7)	4,427 (13.9)	8,106 (12.3)	—	—	—

註 1) 両年度の『岡山市統計書』より作成。

2) 増減欄の () 内は増減率 (%)。

第11表 岡山市町筋別戸口趨勢

(1919年)

		現 住 戸 口					本 籍 人 口			本籍人口 100に 対する現住人口		本籍人口中の 土族の 比 率	建 物 坪 数	
		現 住 戸 数	現住人口	男 女 の 率	1 戸 当 り 人 口	戸 主	本 人 籍 口	男 女	総 数	男 女	総 数		1 戸 当 り	
岡 山 市 合 計		20,898	100,653 ^人	47,235 53,418	53.1 [%]	4.8 ^人	15,890	61,400 ^人	29,665 31,735	163.9	159.2 168.3	16.7 [%]	392,154 ^坪	18.8 ^坪
上 <														

	船 頭 町	245	1,073	482 591	55.1	4.4	178	612	304 308	175.3	158.6 191.9	34.5 (36.1)	3,148	12.9
下 位 一 五 町	久 山 町	33	131	70 61	46.6	4.0	38	147	78 69	89.1	89.7 88.4	8.2	1,178	35.7
	常 盤 町	50	235	118 117	50.2	4.7	72	253	130 123	92.9	90.8 95.1	11.9	1,238	24.8
	尾 上 町	77	295	130 165	44.1	3.8	84	296	141 155	99.7	92.2 106.5	2.7	922	12.0
	高 橋 町	31	136	72 64	52.9	4.4	38	136	70 66	100.0	102.9 97.0	0	480	15.5
	下片上町	68	305	141 164	53.8	4.5	71	279	140 139	109.3	100.7 118.0	1.8	1,478	21.7
	森 下 町	97	480	251 229	52.3	4.9	109	432	219 214	111.1	114.6 107.0	6.3	3,408	35.1
	船 着 町	52	284	145 139	51.1	5.5	70	254	130 124	111.8	111.5 112.1	17.9	3,031	58.3
	藤 野 町	54	269	149 120	55.4	5.0	57	239	119 120	112.6	125.2 100.0	6.7	1,157	21.4
	山 科 町	67	279	137 142	50.9	4.2	71	247	130 117	113.0	105.4 121.4	1.2	1,012	15.1
	下 市 町	70	334	160 174	52.1	4.8	86	295	162 133	113.2	98.8 130.8	3.4	1,621	23.2
	浜 田 町	118	528	263 265	50.2	4.5	131	460	218 242	114.8	120.6 109.5	5.4	2,417	20.5
	中出石町	76	353	158 195	55.2	4.6	76	303	143 160	116.5	110.5 121.9	6.3	1,505	19.8
	児 島 町	74	354	176 178	49.7	4.8	81	303	162 141	116.8	108.6 126.2	7.3	3,295	44.5
	上出石町	140	678	338 340	49.9	4.8	138	575	292 283	117.9	115.8 120.1	6.8	3,550	25.4
	桶 屋 町	200	967	472 495	48.8	4.8	221	813	401 412	118.9	117.7 120.1	24.5	3,903	19.5

註 1) 第3表と同一書より作成。

2) 本籍人口100に対する現住人口が163.9以上は22ヵ町, 100以上163.9未満は7ヵ町, 100未満は3ヵ町である。

きる。この人口増加町筋はいくつかの種類がある。その第一は、上伊福、門田、花畑、下石井などの岡山市の外縁部にあるところで、市制施行時以来の市域ではあっても縁辺部であり、あるいは1899年の市域拡張時に市に編入されたところである。その第二は、内山下、弓之町などの中心部である。桜町、船頭町もここに入れておく。その第三は、六番町、七番町、二番町、五番町、そしてそれにつづく広瀬町、南方である。第一は紡績工場があり、あるいは駅の設置によって急速に開けたところである。花畑、下石井に最も著しいことであるが、女において本籍人口に対する現住人口指数が大きく、女子労働者の増加が著しいであろう。いずれにしても急速に戸数、人口が増加している。第二は行政の中心地、路面電車道に面した商店街であり、人口、後者での戸数増加は著しい。第三の番町は、旧士族町であるが、この時点なお士族のウェイトが高いものの、最大で六番町の51.2%であり、平民が入り込んでいるものと思われる。

これに対する下位15町は、総じて旧来の町方であり、1戸あたり建物坪数が上位15町とくらべて総じて大きい。増加の余地が少なく、そして中心的の商業地からはずれた結果、むしろ人口は停滞気味である、といえるであろう。

かくして、商工業の発展、鉄道・市街電車の敷設という近代交通網の形成にともない、このように商工業地の編成、市域の編成が進展したのである。